

二〇二一年度

入学試験問題

(二月二日午後)

国語

- 一 開始の合図があるまで問題用紙・解答用紙にふれないでください。
- 二 開始の合図があったら、最初に問題用紙九ページ、**解答用紙二枚**を確認してください。
- 三 解答用紙に受験番号と氏名を記入してから始めてください。
- 四 問題についての質問は受け付けません。印刷のはっきりしないところや用事がある時は、声を出さずに手をあげてください。
- 五 字数が指定されている問題は、記号・句読点も一字として数えてください。
- 六 問題用紙は回収しません。
- 七 筆記用具の貸し借りはしないでください。
- 八 試験時間は五十分です。終了五分前になったら知らせます。
- 九 答案を書き終わっても座席からはなれないでください。

—

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(なお、作問の都合上、省略した部分があります。)

日本の自然の美しさは、世界的に定評がある。海あり、山あり、河あり、それらは春夏秋冬という明確な四季によって、いつも異なった表情を見せ、とどまることがない。確かに自然の変化に富んだ美しい国である。

けれども、人間がここに住むとなると、この自然の変化を、美しいとばかりはいつていられない。まず、生活するために、この多彩な変化のひとつひとつに、適応していかなければならないからだ。

たとえば、ひとつの住居で、乾燥した冷たい風が吹く冬に、気温も湿度も高い夏に、あるいは台風や地震にも対応しながら快適に生活するには、どのような建物を造ればいいのか。

このテーマだけでも、さまざまな知恵を必要とする。今日では、こうした自然条件に対して、天然の資源を膨大に消費する、いわゆる西洋文明が生んだ科学技術によって対応している。

だが、こうした自然条件というものは、西洋文明が入ってくる以前の私たちの祖先にとつても、まったく同じであつて、彼らもまた、それに対応して生きて来なければならなかつた。しかも、それに対応するために使える材料は、四方を海に囲まれたこの島の中にしかなかつたから、条件はさらに厳しいものだつた。

① こうした条件の中で、私たち祖先が、生きていくための知恵の原点としたのは、まず「自然の力は征服できない」ということだつた。自然の力には勝てないが、それでも生きていかなければならない。そこで、彼らがどうしたかというところ、自然というものをよく観察して、それにうまく順応していく方法を探すことであつた。

私は旅行が好きで、全国をよく歩きまわる。青年時代は汽車の窓の外でつぎつぎに移り変わっていく風景をよく楽しんだが、はじめて、関東以北を旅したときのことである。同じ農村風景なのに、私が育つた奈良地方の風景とはどこか微妙に違つていて、よく観察してみると、それはどうやら家の周囲を囲んでいる防風林のせいらしい。

防風林に関西地方とは違う樹木を使っている。それが風景そのものを違つて見せているらしいと気付いた。

防風林は文字どおり、風当たりを防ぐためのものである。私の育つた関西地方では、防風林には常緑樹や竹を使っているところが多い。ところが、② 関東以北になるとケヤキが多いのだ。ケヤキは落葉高樹である。夏には葉が生い繁るが、冬はすっかり落葉して裸になる。

風を防ぐためなら、年中、葉が繁っている常緑樹を使ったほうがいいのではないかと私はそのとき思った。なぜ、落葉高樹であるケヤキ

を使うのか。

しかし、私が東京に住むようになってその理由がわかった。風を防ぐ必要があるのは、大体において、夏の台風シーズンである。ケヤキは夏には細かい葉がびっしり繁るから、その役割は十分果たす。問題は冬だ。

関東以北の冬は長い。冬に必要なのは風を防ぐことよりも日照である。

常緑樹だと、冬も葉が繁っていて、風ばかりか光も十分に通さない。ケヤキはこの時期には枝だけを残して、葉を落とすから、日光をさえぎらない。

南のほうは冬の日射しも強いから常緑樹でもいいが、関東から北は、夏、風を防ぐとともに冬は日射しが欲しい。

それが、防風林に落葉高樹であるケヤキを使った理由である。

私たちの祖先の見事な自然への順応の知恵である。

今日、世界中に影響を及ぼしている西洋の科学の原点は（ ）と考えたところから発想しているといっていだらう。私たちは、そういう西洋の発想に馴れてしまっているから、私たちの祖先の人力は自然の力に及ばない」という原点から出発したさまざまな発想や遺産を非科学的だと片付けることが多い。

だが、ケヤキの知恵は非科学的だろうか？ 私たちの祖先は、それを科学という名前で呼ばなかっただけで、実は、高度な科学性を持った知恵で、さまざまに変化する自然に対応して生きてきているのである。

日本人が、最大の知恵をしぼったものに、築堤」という土木工事がある。

日本は雨の多い国で、大水が出ると必ず川が氾濫する。川の氾濫を防ぐことは稲作を主産業とした日本人にとって、もっとも大切な生存条件であった。また、日本列島はアジア・モンsoon地帯にあるために台風が来る。高潮を防ぎ、港を守る防波堤が必要である。

そういう川と海に対する戦いという条件から、③日本では築堤技術がひじょうに発達する。

堤を築くということは、いかにも泥を盛っていけばできるように見える。西洋の堤防はまんじゅうの皮を張るように、堤の中心に対して上から泥をかけていく。日本の堤防は布団を積み重ねるように、一段ずつ叩いて積み重ねていく。実は、そうするほうが堤防は決壊しにくいのである。

積み重ねていく石や土壌もまた、同じ質のものでは意味がない。粘土層のものとか三和土（粘土、砂利、にがりの混和土）とか、あるいは質の異なる平たい石などを交互に叩いて積んでいく。日本では築堤のことを「土手をつく」という。この「つく」というのは、

ドカン、ドカンと突くことからきている。それに「ぎ」がついて「ぎづく」——築くなる。土を重ねて固めていくのが、堤を築くということである。固めるのは水の漏れを防ぐためである。

これが日本の土木工法の基礎で、それをもっとも精巧に利用したのが、武田信玄の「信玄堤」である。信玄堤は、釜無川という甲府盆地を流れている川が、たえず氾濫するので、それを防ぐために築かれたものである。しかも、この川の氾濫は鉄砲水によることが多く、おそろしく水圧が高い。まず、これに対応しなければならぬ。

そこで、鉄砲水の水圧を殺すために甲府の竜王という所で、この川の流れを大きな自然の岸壁にぶつけて、水流のエネルギーを削いでから南に流すことにした。これでまず水流のエネルギーによる、堤防の決壊を防いだ。つぎは水かさの高まりによる氾濫だ。氾濫はいつ起こるか予測がつかない。そこで堤防を築くとき、これを一挙に阻止しようと考えないで、氾濫を予想して堤防を築くのである。雁木堤という突堤を川中に出すほかに、水流のエネルギーが、集中しそうな堤防を強化するのはまったく逆に、右左の堤防を切ってしまう。そして、わざと水が流れ出すようにして、その外側に第二堤防を築き、遊水をそこへ流す。つまり、水流のエネルギーを利用して、分水してしまうわけだ。

こうして、流路をいくつかに分け、水流エネルギーを殺しながらいちばん最後には、それを集めて、富士川に流してしまう。要するに、計りしれない自然のエネルギーに逆らわず、それを分散させることによって、エネルギーを殺していくという、ひじょうに精巧な氾濫防止法を用いたのが、<sup>④</sup>この信玄堤なのである。

(中略)

人間はいかに科学が追いかけてようと、元来が自然の中で生まれ、死んでいく生きものである。だから、自然と調和して生きることが、実はもっとも科学的なのだ。それを西洋の科学の発想は、「自然を征服できる」というところに立脚しているから、往々にしてこのように誤りを犯すのだ。もちろん、だから科学はいらぬというのではない。ただ、合理性を追求する科学が、それゆえに不合理を犯すことも知ったうえで、科学を使っていかなければならぬと思うのである。こうした科学が犯す不合理を、私は「合理の不合理」と呼んでいるが、そういう観点から見ると、<sup>⑤</sup>私たちの祖先の知恵というものは、一見、不合理に見えながら、実は合理的であるという「不合理の合理」に満ちている。ただ、私たちにはその知恵が<sup>⑥</sup>不合理という壁にさえぎられて、その中の合理性が見えない場合が多いのである。

(樋口 清之『梅干と日本刀―日本人の知恵と独創の歴史』より)

(注) 「このような誤りを犯すのだ」：前段に『日本人が、深い独創性を持ち、非科学的どころか、科学的説明があとから追いかける必要はないほどの科学性を持っていた』という表現がある。

問一 本文中には次の一文が抜けています。どこに入りますか。直前の五字を抜き出して答えなさい。(句読点含む)

それが、関東地方を旅行したときの最初の疑問であった。

問二 ——線部①「こうした条件」とありますが、どのような条件ですか。二つあげなさい。

問三 ——線部②「関東以北になるとケヤキが多いのだ」とありますが、この理由として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夏場の暴風以上に寒気が入り込むことを避けるため、寒気の壁となる背の高い高樹のケヤキが適切だから。
- イ 強い風を防ぐことも大切だが、長い冬となる関東以北では日が入ることが大切であり、葉が落ちた方が好ましいから。
- ウ 台風シーズンを乗り越え、日射しを避けるためにも、葉が繁っているケヤキを植えておいた方がよいから。
- エ 竹などと同様に、冬場に葉が繁ることによって、関東以北にとっては貴重な日射しが入り、暖をとることができるから。

問四 本文中の( )にあてはまる言葉を、本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問五 — 線部③「日本では築堤技術がひじょうに発達する」とありますが、以下の問いに答えなさい。

(一) 「ひじょうに」と同じ意味で使われている別の言葉を、本文中から五字で抜き出して答えなさい。

(二) 日本の築堤技術について説明しなさい。

問六 — 線部④「この信玄堤なのである」とありますが、信玄堤と同じような「力の使い方」をしている例として最もふさわしいものを、

次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高いところから着地をするのであれば、ひざを柔らかく使う。

イ 全速力で走ると汗をかくのであれば、歩いて行動をする。

ウ 暴風雨の中を歩いて帰宅するのであれば、傘は差さない。

エ ボールを遠くに飛ばすのであれば、助走をつける。

問七 — 線部⑤「私たちの祖先の知恵」とありますが、これを具体的に示した部分を本文中から九字で抜き出して答えなさい。

問八

——線部⑥「不合理という壁にさえぎられて、その中の合理性が見えない」とありますが、どのような状態ですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 間違っていると分かっているが、皆と同じやり方をせずにはいられない状態。

イ たくさんの選択肢がある中で、最も難しい方法から試している状態。

ウ 遠回りをしているやり方に思えて、価値のある道から外れていってしまう状態。

エ 自分で最初に決めたやり方だけを、疑わずに繰り返してしまっている状態。

問九

あなたが日本について美しいと思う点を経験をもとにして挙げ、その理由をふくめて二百字以内で書きなさい。

二

次のカタカナの文章を読んで、漢字とひらがなと読点を正しく用いて書き直しなさい。

ニホンニハアメリカノタイシカントリヨウジカンガアワセテロツカシヨアル。

イチバンタイセツナシゴトハニホンニスムベイコクジンヲタスケルコトトニチ

ベイノカンケイヲフカメルコトダ。サイキンデハゴガクリユウガクヲシタイト

カンガエルニホンノガクセイモフエジヨウホウヲアツメテイキヨウスルナドノ

シエンモジユウヨウナヤクメノヒトツデアアル。

三

次の(1)～(5)の——線部の漢字をひらがなに、(6)～(10)の——線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- (1) 満身まんしんの力をふりしぼる。
- (2) 収獲かくされた穀物。
- (3) 公然こうぜんと行われた行為。
- (4) 旅客りやくかくと貨物を同時に運ぶ。
- (5) 勝利への確固かくこたる決意。
- (6) アツい雨雲におおわれた空。
- (7) 徐々に日ひがクれる。
- (8) 絹きぬの糸で布をオる。
- (9) 次の発表のコウソウを練る。
- (10) カンレイとなっているあいさつ。

四

次の(1)～(5)の( )にあてはまる言葉としてふさわしいものを、あとのア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。  
なお、同じ記号は一度しか使えません。

- (1) 社長が( ) 新聞を用意する。  
(2) 先生が( ) ことをよくメモする。  
(3) お客様が( ) ので失礼のないように。  
(4) 目上の方が( ) まで待ってから食べる。  
(5) 校長先生が旅行のお土産みやげを( ) 。

ア おっしゃる      イ いらっしゃる      ウ くださる      エ 召し上がる      オ ご覧になる



